校長室だより～燦燦～ №２１

パンキョー

2019.12.9

だいぶ昔のことで申し訳ない。私は大学に入り講義を聞いていた。すると、そのほとんどがつまらなかった。自分がやりたい内容ではなかった。イメージしていた内容ではなかった。それらは「一般教養」と呼ばれるものだった。あの頃の私は、なぜこのつまらないものが大学生に必要なのかわからなかった。大学に入ったら早く専門的なことを学びたいのに一般教養すなわち“パンキョー”は高校の授業の繰り返しのようでもあり、学部の専門性とはかけ離れたもののようでもあり、非常につまらなかった。いったい何のために大学に入ったのか。

高校３年生の娘が大学を受験するため、大学のガイドブックを見る機会があった。カリキュラムを見てみると、１年次から学部、学科に関わる専門的な内容がある。昔のように一般教養が並んでいたりはしない。最初から目指しているものが明確なカリキュラムとなっている。その代わり、一般教養のようなものは、自分で自由に選択できるようになっている。これならいい。

「すぐ役に立つことは、すぐ役に立たなくなる」ということがある。アメリカのマサチューセッツ工科大学の先生が次のことを言っている。

「マサチューセッツ工科大学は、科学技術の最先端の研究をしています。当然、学生にも最先端のことを教えるのですが、最先端の科学をいくら教えても、世の中に出ていくと、世の中の進歩は速いものだから、だいたい四年で陳腐化してします。そうするとまた勉強し直さなければいけない。そんな四年で古くなるようなものを大学で教えてもしようがない。そうではなく、社会に出て新しいものが出てきても、それを吸収し、あるいは自ら新しいものをつくり出していく、そういうスキルを大学で教えるべきでしょう」

なるほど、そういうことか。今頃になって私が大学の頃に一般教養を学ぶようになっていた理由がわかった。“パンキョー”などと言って揶揄している場合ではない。大学は、すぐには役に立たなくてもいいことを教えるのかもしれない。すぐに役に立つことは、世の中に出て、すぐ役に立たなくなる。すぐには役に立たないことが、実は長い目で見ると役に立つ。

本当の教養というものは、すぐには役に立たないかもしれないけれど、長い人生を生きていく上で、自分を支える基盤になるものである。その基盤がしっかりしていれば、世の中の動きが速くてもブレることなく、自分の頭で物事を深く考えることができるようになる。

人生をある程度生きてきた私は、今改めて勉強し直したいと思うようになった。もう１０年ほど前になるが、高校の時にはあまり理解できなかった「世界史」を勉強し直したことがあった。すると、予想以上に理解できた。高校時代の私はいったい何をやっていたのだろうかとがっかりした。中学校の英語の学習内容を総復習したこともあった。こちらは理解するというよりは、覚えているかどうかの問題だった。「ああそういえば、こんなことも学習したな」の繰り返しである。

自分からやる勉強はおもしろいし、楽しい。勉強とは本来そういうものである。だいぶ昔に「学校」を卒業したが、社会人になってからのほうが、熱心に勉強するようになった。高校時代にもう少し勉強していればと思うこともあるが、あの頃の私は、それができなかった。これからでも遅くはない。日々勉強あるのみである。